

『研究報告』バックナンバー

第1号(1985)

- 大川 勇: ある深層の物語の読解 — ムー
ジルの『特性のない男』研究のための序説
金子 孝吉: リルケの詩『偶像』について
田辺 玲子: 関係世界の創出 — アネッテ・
フォン・ドロステ=ヒュルスホフの詩人像とそ
の世界
奥田 敏広: トーマス・マンの「モンタージュ技
法」について — 小説形式のパロディー

第2号(1986)

- 松村 朋彦: 心理学と小説のあいだ — カー
ル・フィリップ・モーリッツ『アントン・ライ
ザー』とその周辺
大川 勇: 千年王国を越えて — ムージルの
『特性のない男』における(別の状態)の行
方
加藤 丈雄: 『公子ホムブルク』について — 死
の恐怖とその超越を中心に
奥田 敏広: リオン・フォイトヴァンガーの小説
『成功』におけるヒトラー像について — 20
年代の証言の一つとして

第3号(1988)

- 加藤 丈雄: ハッピーエンドと悲劇 — 『公子ホ
ムブルク』の多義性について
兵頭 俊樹: ヘルダーリンの‘Wie wenn am
Feiertage...’に現れるディオニュソスの形象
をめぐって
竹本 まや: トーマス・マンの『すげかえられた
首』試論
友田 和秀: 『魔の山』試論 — 主人公ハンス・
カストルプの形姿をめぐって

第4号(1990)

- 津田 保夫: 『ヴァレンシュタイン』試論 — ネメ
シスの悲劇の観点から

- 千田 春彦: フライダンの『ベシヤイデンハイ
ト』研究のために — 三つの《はざま》をて
がかりとして
宮田 眞治: 覚醒へ向けての夢想 — 『ハイン
リッヒ・フォン・オフターディンゲン』試論(1)
千田 まや: トーマス・マンの『ファウストゥス博
士』 — デューラーの機能についての一考
案
斎藤 昌人: 一カフカ像 — 『流刑地にて』をめぐ
って

第5号(1991)

- 青地 伯水: ホーフマンスタールの『厄介な男』
における「なおざりにされた生」と「達成され
た社会性」
谷口 栄一: C. F. マイアーの『ユルク・イエナッ
チュ』について — その多義性に関する一
考察
津田 保夫: 後期シラーの悲劇論に関する一考
察 — 悲劇的恐怖の概念を中心に
斎藤 昌人: 閉ざされる世界

第6号(1993)

- 片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『ラデツキ行進
曲』 — 「比較」と「繰り返し」のモチーフを
めぐって
千田 春彦: デア・シュトリッカーの『閉じ込めら
れた女房』について — 物語の重層構造
の目指すもの
福田 覚: 自然模倣説における真理媒介の構
造(1) — レッシング(詩学)に潜在する模
倣説の輪郭
青地 伯水: W. ヒルデスハイマーの『リープ
ローゼ・レゲンデン』におけるグロテスクなも
のについての一考察

第7号(1994)

飛鳥井 雅友: 「しばしばそれは絶望的な対話
なのです」 — パウル・ツェラーンにおける
対話の概念をめぐって

吉田 孝夫: 時間の渦 — R・M・リルケ『新詩
集』の数篇から

片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『右と左』 — 二
つの方向

第8号(1995)

濱中 春: シラーの『マリア・ストゥアルト』 — 二
人の女王のドラマ

中村 直子: 分離動詞の認定をめぐる諸問題

飛鳥井 雅友: 神学の拒否と詩学 — パウル・
ツェラーンにおける神義論の問題

第9号(1996)

中村 直子: 正書法と分離動詞

濱中 春: シラーの『ヴィルヘルム・テル』におけ
るスイスの風景

片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『百日天
下』 — ヨーゼフ・ロートのワーテルロー

飛鳥井 雅友: 「胸は張り裂け」 — ゴットフリー
ト・ベンの場合

第10号(1997)

濱中 春: シラーの『逍遙』における風景をめぐ
って — 風景の補償モデルとその矛盾

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける寓
話性(1) — 散文小品『通り(I)』について

片桐 智明: 物語の行方 — ヨーゼフ・ロートの
『果てしない逃走』と『カプツィン派教会納骨
堂』をめぐって

第11号(1998)

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける寓
話性(2) — 放蕩息子をめぐる二つの散文
小品について

片岡 宜行: ドイツ語の与格の分類について

國重 裕: クリスタ・ヴォルフ『クリスタ・T への追
想』について — その語りの構造

飛鳥井 雅友: ゴットフリート・ベンにおける〈抒
情的自我〉概念の登場をめぐって

第12号(1999)

片岡 宜行: ドイツ語の与格と空間補足語につ
いて

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーの絵画描写
について — エクプラシスの観点から

片桐 智明: ハイミート・フォン・ドーデラー四十
歳の小説 — 『最後の冒険』、騎士とドラゴ
ンの小説

KUNISHIGE Yutaka (國重 裕): Zwischen
Phantasiewelt und Wirklichkeit – Essay über
Ilse Aichingers „Die größere Hoffnung“

第13号(1999)

KUNIEDA Naotaka (國枝 尚隆): *Wilhelm Tell*
als ästhetisches Projekt

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける通
俗小説とメルヘンの再話について — 対
句法に関する試論

第14号(2000)

廣川 智貴: 文体論の理論と実践 — クライス
トの『ロカルノの女乞食』を例にして

佐々木 茂人: カフカの作品における歌のモ
ティーフ — 『歌姫ヨゼフィーネ、あるいは
ネズミ族』を中心に

國重 裕: オーストリア小説に見る《家族ドラマ》
の変遷 — M.シュトレールヴィッツ『誘惑。』
(1996)

第15号(2001)

伊藤 白: 『ブデンプロック家の人々』試論 — 「市民と芸術家」の生み出す四つの類型から

池田 晋也: アルトゥール・シュニッツラーの『自由への道』 — 市民的なものと芸術的なもののあいだを浮遊する生

川島 隆: カフカの息子たち — 短篇「十一人の息子」読解

中原 香織: ヘルマン・ヘッセの『シッダールタ』について — 葛藤の不在がもたらす問題をめぐって

羽坂 知恵: 日常の「ヒーロー」 — ハインリヒ・ベルの『道化師の意見』について

第16号(2002)

佐々木 茂人: 東方ユダヤ人難民とプラハのユダヤ人 — カフカの伝記研究のために

川島 隆: 「こいつは途方もない偽善者だ」 — カフカの中国・中国人像

國重 裕: ユーゴスラヴィア内戦をめぐる西欧知識人の応酬 — ペーター・ハントケ『冬の旅』に対する議論を中心に

第17号(2003)

池田 晋也: 描かれた劇場 — シュニッツラーの短篇『侯爵様御臨席』

伊藤 白: ゼゼミ・ヴァイヒプロート — 『ブデンプロック家の人々』における女性像とキリスト教

川島 隆: ユダヤ人と中国人 — カフカにおける人種と性愛をめぐって

武田 良材: クラウス・マンの『メフィスト』 — ドイツ反ファシズム運動の失敗の反映として

第18号(2004)

廣川 智貴: 主語の文体論 — クライストの『決闘』を中心にして

熊谷 哲哉: 言葉をめぐるたたかい — シュレーバーと雑音の世界

ASAI Maho (浅井麻帆): Sehen im Wörterverbindungsraum bei Rainer Maria Rilke — Eine Wandlung vom Sehen hin zur Rose

川島 隆: 『万里の長城』における「男性」と「労働」の位置 — カフカのシオニズム理解を手がかりに

伊藤 白: 白いドレスのロッテ — トーマス・マン『ワイマールのロッテ』における女性像

武田 良材: 道徳的な女たらし — ヘルマン・ケステン文学のモラリスト像

國重 裕: 現代文学は「歴史」を語りうるか? — Katrin Askan (1966~)に見るDDR文学の現在

書評・文献紹介

第19号(2005)

青木 三陽: 手紙を書く騎士 — 『パルツィヴァール』における「学識」と「書物」の意味について

樋口 梨々子: 文学創作への萌芽としての音楽美学 — E.T.A.ホフマンの短編『ドン・ファン』試論

寺井 紘子: ホーフマンスタール文学における生と絵画

浅井 麻帆: ウィーン分離派館とヨーゼフ・マリア・オルブリヒ — 時代と分離派が求めた合目的性

熊谷 哲哉: 結び目としての神経 — シュレーバーにおける宇宙と身体

池田 あいの: 手紙論としての手紙 — カフカの恋文をめぐって

伊藤 白: ショーシャ夫人は美しいか — トーマス・マン『魔の山』における女性像と「東」

池田 晋也: ジャズアレンジされるヨーロッパ — ハンス・ヤノヴィッツの小説『ジャズ』

武田 良材: モラリストへの成長 — ヘルマン・ケステン文学のモラリスト像 その二

書評・文献紹介

第20号(2006)

青木 三陽： 歴史とフィクションの狭間で — ヴォルフラムの「原典言及」をめぐって

樋口 梨々子： E.T.A.ホフマンの『新旧の教会音楽』 — 「ロマン主義的なもの」との関連において

伊藤 白： フロイライン・エンゲルハルト — トーマス・マン『魔の山』における女性像と「同性愛」

廣川 香織： ハリー・ハラーの痛む足 — ヘルマン・ヘッセの『荒野のおおかみ』における身体について

池田 晋也： 文学的ジャズ表象の諸形態 — ブルーノ・フランクとフェーリクス・デールマン

武田 良材： モラリストの革命性 — ヘルマン・ケステン文学のモラリスト像 その三

書評・文献紹介

第21号(2007)

寺井 紘子： 芸術と芸術家 — ホーフマンスタールとリルケの場合

廣川 香織： 叶えられた理想と失われた身体 — ヘッセ文学の転換期における「顔」のモチーフについて

永畑 紗織： ヨハネス・ボブロフスキーにおける闇と光 — 『ねずみのおまつり』を中心に

ヴェレーナ・ルツェマン(川島隆 訳)： たくましい少女たち、繊細な少年たち — ヨハンナ・シュピーリの児童文学作品について

書評・文献紹介

第22号(2008)

土屋 京子： プロメテウスの火と E.T.A.ホフマンの『G町のジェズイト教会』

藤原 美沙： 子どもへ向ける視線 — アイヘンドルフの2篇の詩より

YAMAZAKI Asuka (山崎 明日香)： Das Verschwinden der Differenzierung in der Todesgemeinschaft in Richard Wagners *Tristan und Isolde*

浅井 麻帆： 「セセッション」から「分離派」へ — 日本の Wiener Secession 受容史における訳語の変遷について

武田 良材： アンネマリー・シュヴァルツェンバハにおける反ナチス — エーリカ、クラウス・マン、そして山との関係

永畑 紗織： 異教の神ペルーンとサルマチア — ボブロフスキーの短編『異教徒たちの至福』について

菅 利恵： ドイツにおける「ドイツ — トルコ」二言語教育 — 複言語主義とドイツ語教育のはざままで

BID(伊藤白 訳)： 『図書館が良い21の理由』書評・文献紹介

第23号(2009)

菅 利恵： 愛による主体化 — シラーの劇作品をめぐる試論

土屋 京子： 言語起源論と E.T.A.ホフマンの動物 — 犬ベルガンサ、猿ミロと猫ムルの言語をめぐって

藤原 美沙： 詩人と「子ども」の関係について — アイヘンドルフの小説『詩人とその仲間』より

YAMAZAKI Asuka (山崎 明日香)： Die Widerspiegelung des zeitgenössischen Englandbildes durch Tristan in Richard Wagners *Tristan und Isolde*

加賀 ラビ： ホーフマンスタールの『アルケステイス』について

武田 良材： オリентでの自分探し — アンネマリー・シュヴァルツェンバハの『幸せの谷』

永畑 紗織： 境界に立つショーペンハウアー — ボブロフスキーの短編『窓辺の若い紳士』について

第24号(2010)

- 西尾 宇広： 公／私をめぐる価値観の交錯 — クライスト『ミヒヤエル・コールハース』
- 土屋 京子： 博物学の夢想と冒瀆 — E.T.A. ホフマンの『ハイマトカーレ』と『蚤の親方』
- 藤原 美沙： 二人の女性と「子ども時代」の関係 — アイヒェンドルフの短篇『誘拐』より
- 熊谷 哲哉： カール・デュ・プレルの心霊研究における科学と発達
- 池田 あいの： 音楽的翻訳の可能性 — ブロート、ヤナーチェク、カフカ
- 宇和川 雄： イメージ世界の観相学 — 1931年頃のベンヤミンのイメージ思考について
- 武田 良材： コインの亡命小説の風刺について — 長編小説『急行三等車』をめぐる議論を中心に

第25号(2011)

- 西尾 宇広： 友人たちのデモクラシー — クライスト『ヘルマンの戦い』における友情の論理
- 田辺 真理： E.T.A. ホフマン『ある劇場監督の奇妙な悩み』について
- 土屋 京子： 「わたし」について語る猫 — 自伝文学と E.T.A. ホフマンの『牡猫ムルの人生観』
- 麻生 陽子： 「鏡像」の詩学 — アネッテ・フォン・ドロステ＝ヒュルスホフの『ユダヤ人のブナの木』
- 宇和川 雄： バラージュ、コメレル、ベンヤミンと無声映画の時代 — 「動物の身振り」のなかで
- 風岡 祐貴： インゲボルク・バッハマンの『出航』にみる「抵抗」の表現について

第26号(2012)

- 西尾 宇広： ロベール・ギスカールあるいは不在の君主 — クライストの民衆観と遅延された革命
- 土屋 京子： 闇に生きる動物の世界体験 — E.T.A. ホフマンの『廃屋』における動物磁気と共通感覚について

- 藤原 美沙： 「すべての声がともに春をつくる」 — アイヒェンドルフの『大理石像』における「子ども時代」の再現
- 麻生 陽子： もうひとつの農村ユートピア — ペーター・ローゼンガーター『最後の人ヤーコブ』における「アメリカ」
- 加賀 ラビ： 20世紀のオペラ・セリア — ホーフマンスタールの『ナクソス島のアリアドネ』について
- 武田 良材： 子どもの反抗 — イルムガルト・コインの小説『子どもたちが一緒に遊んではならなかった女の子』
- 寺澤 大奈： マックス・フリッシュ『ビーダーマンと放火魔たち』 — 「教訓のない教訓劇」と経済格差の問題
- 山崎 明日香： ハイナー・ミュラー『エレベーターの男』の素材について — フィリップ・K・ディックのSF小説からの影響を探る

第27号(2013)

- 藤原 美沙： 想像力・読書・教育 — アイヒェンドルフの『予感と現在』における「子ども」に関する諸問題
- 土屋 京子： 国際学会報告 — *Konzepte des Subjekts und Konzepte der Subjektivität: 1800/1900 29.-31. August 2013 in Bielefeld*

第28号(2014)

- 林 英哉： ヘルダリンにおける父と母のイメージ — 詩作と心理の「同一性という謎」
- 麻生 陽子： 女の芸術創造 — ドロステ＝ヒュルスホフの未完の悲劇『ベルタあるいはアルプス』における両性具有のモチーフについて
- 池田 晋也： 文明のなかの文学 — ハインリヒ・ハウザーの小説『海を渡る雷鳴』について

第29号(2015)

菅 由紀子： レッシング、ヘルダー、フリードリヒ・シュレーゲルのシェイクスピア批評 — アリストテレス規範とのかかわりを中心に

益 敏郎： 客観性をめぐるヘルダーリンとシラーの近代芸術思想 — アドルノの『パラタクシス』を導入として

中岡 翔子： 境界に立つ女ゴーレム — アヒム・フォン・アルニム『エジプトのイザベラ』にみるジェンダーについて

森口 大地： 19世紀前半におけるヴァンピリスム — E. T. A. ホフマンに見るポリドリの影響

籠 碧： 表現主義文学とナチス・ドイツにおける「精神疾患」イメージの類似性

第30号(2016)

菅 由紀子： ヴィーラントのシェイクスピア翻訳における「忠実さ」 — テキストへの介入についての考察

林 英哉： 神と人間を新たに結ぶ言語 — 18世紀ドイツの言語起源論とヘルダーリン

籠 碧： アルトゥル・シュニッツラーの医学的テキストにおける精神的「健康」/「病」の境界について — ロンブローゾとクラフト＝エビングに対する書評から

橋本 紘樹： アドルノにおける知識人像 — 理論的観点からの再評価の試み

飯島 雄太郎： 死者を語る言葉 — トーマス・ベルンハルト『カルタ遊び ある遺稿』における言語懐疑について

第31号(2017)

森口 大地： ヴァンパイアはなぜ腐らないのか — ヴァンパイアをめぐる1730年代ドイツ語圏の学説

山口 知廣： カフカの関心と『リヒャルトとザームエル』における表現の関係性 — カイザーパノラマに関する記述後の関心の変遷

研究ノート

益 敏郎： 非讃歌的な讃歌詩人ヘルダーリン

を求めて — 詩と社会をめぐる戦後の議論と近代以降のピンダロス受容を手がかりに

第32号(2018)

森口 大地： ラウシュニクの『死人花嫁』に見られるヴァンパイア像 — 〈宿命の女〉と〈宿命の男〉の二重構造

籠 碧： 話を聴く語り手 — シュテファン・ツヴァイクの柀物語とフロイトの精神分析

飯島 雄太郎： トーマス・ベルンハルト『ヴァイトゲンシュタインの甥』における告解のモチーフについて

テオドル・アドルノ/アーノルト・ゲーレン(橋本紘樹 訳)： 公共性 — それは本来いかなるものか? (ラジオ対談)

第33号(2019)

森口 大地： 矮小化されるルスヴン卿 — 1820年代の仏独演劇におけるヴァンパイア像

山口 知廣： 観客と役者 — カフカの日記におけるイディッシュ演劇

山下 大輔： 学者犬の語りにもみられる複数の認識レヴェル — フランツ・カフカ『ある犬の研究』

第34号(2020)

益 敏郎： ヘルダーリンの『唯一者』における語り — 抒情的主体と讃歌的(非)主体のあいだ

網谷 優司： フロイト理論におけるエディプスコМПレックス概念の形成と変遷

山下 大輔： 主観的な報告者 — フランツ・カフカ『あるアカデミーへの報告』における語りの形式

石ヶ森 未喜： カフカの『城』: 対話とアイデンティティー形成

第35号(2021)

- 土谷 真理子： 牧歌と自然詩 — ゲスナーとハラーを中心に
- ポルドゥニャク エドワルド： 醜による美の批判 — C. M. ヴィーラント『ビリビンカー王子の物語』における想像力の機能
- 杉山 東洋： シュティフターの『晩夏』における「市民社会」と「人間社会」 — W. H. リールの市民社会論との比較に基づく社会史的試論
- 網谷 優司： メランコリー論として見る初期フロイトの歩み — 「躁的防衛」から「投影性同一視による喪の仕事」へ
- 山口 知廣： 聴く、書く、朗読する — フランツ・カフカの日記と手紙における朗読
- 林 英哉： 顔と声を伝える文学 — ナチスの障害者安楽死政策「T4 作戦」とティノ・ヘマン『フーゴー』(2005)

第36号(2022)

- 杉山 東洋： 亡き父の現前、死を待つ伯父の社交 — シュティフターの『老独身者』あるいは世代交代の実践
- 藤田 隼風： 「額縁」の物語として読む『変身』 — フランツ・カフカにおける芸術と女性の問題をめぐって
- 研究ノート
- 網谷 優司： ニーチェのニヒリズム論とフロイトのメランコリー論 — 概念史からの比較考察

INHALT

POLUDNIAK Edward: Freies Spiel mit Regeln — Einbildungskraft und Ironie in Wielands <i>Idris</i>	(1)
AMITANI Yuji: Versuch über Friedrich Nietzsches <i>Also sprach Zarathustra</i> — Die Überwindung des Nihilismus durch den Humor.....	(27)

執筆者

網谷 優司 yujis.cat.a@gmail.com

(奈良女子大学等非常勤講師)

ポルドゥニャク
エドワルド vongoethe26@gmail.com

(京都大学大学院博士後期課程)

第 37 号編集長

橋本 大樹 besumaku@gmail.com

(京都大学大学院博士後期課程)

第 37 号査読係

土谷 真理子 mtausjpn@yahoo.co.jp

(京都大学等非常勤講師)

第 37 号論文査読委員

川島 隆 (京都大学准教授)

菅 利恵 (京都大学教授)

土谷 京子 (高知大学准教授)

西村 雅樹 (京都大学名誉教授)

松村 朋彦 (京都大学教授)

(五十音順)

研究報告 第 37 号

非売品

2024 年 1 月発行

発行所 京都大学大学院独文研究室 研究報告 刊行会

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部内

TEL 075-753-2826

郵便振替 01060-2-38520

印刷所 株式会社 田中プリント

〒600-8047 京都市下京区松原通麩屋町東入

石不動之町 677-2